

むらとまち

——生活の意味空間——

I 伝統的生活空間

東南アジアにおける人間の居住は、その選択に際して生態的条件に若干の特徴を示しつつも、人口成長、農業発展、都市発展の過程に応じて次第に活動域の重心を移行させながら拡大して来た。大陸部においても、島嶼部においても、伝統的な居住地の一類型は、山地の谷あいの地に求められる。大陸部において比較的早期からみられた相当規模に達する王都の発展は、それらが交通の要衝にあたる位置に立地したことも加わって、伝統的居住地のイメージを混乱させる側面があるが、島嶼部では山地部の高涼地が伝統的な居住地であったというイメージがかなりよく保たれている。その最も典型的な例はスマトラのパダン高地を揺籃の地とするミナンカバウ人の場合である。¹⁾

ローガンによると、1849年頃におけるスマトラの全人口は、248万7310人である。この人口がスマトラ島47万3606km²に分布しているとする、人口密度5.3人/km²を算することになる。彼の数値ではこのうち38万5000人が3000平方マイル(7770km²)のミナンカバウ地域に住んでいたとされている[Logan 1849:361]。この数値を用いて計算すると、ミナンカバウ地域の人口密度は49.5人/km²に達し、これを除いたスマトラ他地域の4.5人/km²の11倍という高さになる。現在のミナンカバウ人の主要居住地域である西スマトラ州の面積は4万9778km²であるから、ローガンの示したミナンカバウ地域はその6分の1弱であって、真の中心域のみ指しているとみなすことができる。ローガンの数値の正確さについては多くの問題があるにせよ、上述の人口密度は、人口分布からみた居住の核心域の存在を、19世紀中葉の状況において明示するものである。

居住の核心域を密度の高さにおいて捉え、それを山間部に求めることは一つの見方であるが、他の地域にも人々が永年居住してきたという事実も無視する訳にはいかない。その1は、小支谷沿いあるいは尾根づたいに広がった焼畑耕作民の居住地、その2は海岸または河口部における海の民の居住地である。前者は周期的土地利用のための休閑地を必要とするので、人口密度を必然的に低く保つことになり、人口増加が顕著な場合には、サラワクのイバン族がその伝承をよく伝えているように、新天地を求めて移動を行なうことになる。後者の生活については、その生活体系が漁撈とサゴ採取を基盤としていたものか、交易・交換を基盤としていたものか、時代的な変遷が加わると不明の部分が多いし、舟の利用が移動を容易にする要素として付加されるのでその実態の把握がさらに困難である。航海を通して東南アジアを海岸沿いに観察することが多かったヨーロッパ人の眼に比較的とまり易かったし、また交易港における土着支配者との関係も重要であったが、その実数を過大評価することは危険である。過去におけるより大きな活動性を認めるとしても、これら両者は共に基本的に少数性を保って来たものと思われる。

核心域の存在を含むにもかかわらず、東南アジアが、全体的にみて基本的に低人口密度を示していたという事実は重要である。東南アジアにおける小人口状況は、過去においてより顕著な様相を示している。西暦1000年頃のインド亜大陸（面積 4.5×100 万 km^2 ）の人口が7900万人、中国本土（ 4.0×100 万 km^2 ）の人口が6000万人と推定されるのに対して、面積的には遜色がない東南アジア（ 4.08×100 万 km^2 ）の全人口は900万人程度に過ぎなかったという推定もある [McEvedy & Jones 1979]。そしてこの相対的状況は表1にみるように、現在に至るまである程度維持されて来た。²⁾ 現在、1500万人の人口を保有するマレーシアが、過激とも言える人口抑制策をとっている中国などと対照的に、7000万人までの増加を可とする人口政策をとったりするのも、ある意味ではこの傾向の延長線上において捉えることができる。

低い人口密度がもたらし得る社会編成には多様な選択の可能性があるが、一義的に決定されるものではない。交通の手段として利用し得る河川が大きければ

表1 東南アジアの人口と人口密度

() 内人口密度

	面積 (100万km ²)	人 口 (100 万人)						
		1600	1700	1800	1850	1900	1950	1984
東南アジア	4.08	20.8 (5)	24 (6)	31.5 (8)	42 (10)	83 (20)	177 (43)	392 (96)
大陸部	1.94	11.25 (6)	12.75 (7)	15.5 (8)	21 (11)	35 (18)	72 (37)	157 (81)
島嶼部	2.14	9.55 (4)	11.25 (5)	16 (7)	21 (10)	48 (22)	105 (49)	235 (110)
インド ¹⁾	4.22	130 (131)	160 (38)	185 (44)	225 (53)	280 (66)	430 (102)	940 (223)
中国本土	4.00	150 (38)	150 (38)	320 (80)	420 (105)	450 (113)	520 (130)	1054 (263)
ヨーロッパ ²⁾	4.22	72.75 (17)	92.25 (22)	135.75 (32)	190.5 (45)	271 (64)	362.5 (86)	443 (105)

1) パキスタン、バングラディシュを含む。

2) ロシア、バルカンを除く。

McEvedy & Jones(1979)による。ただし1984年の数値は、1984 *Escap Population Data Sheet* による。
 (ヨーロッパのみは、1983 *World Population Data Sheet of the Population Reference Bureau, Inc.* による。)

分散した人口状況の中からも、相当な規模の支配権力が発生し得る。東南アジア大陸部では、とくにイラワジ川、ソンコイ川を利用してビルマやベトナムにこの状況が成立し、規模はやや劣るがチャオプラヤー川を利用してタイにおいても同様の状況が生じた。これらの権力の中心は、ときには分断された大人口状況下における国家（たとえばヒンドゥスタンの諸国家）よりも強大であるとみなされることもあった。しかし、東南アジアに発生したこれらの権力はしばしば短命であり、王権の所在地としての王都も、たえざる興亡を繰り返した。

東南アジアに興亡した都市の数と規模は絶対的な小人口を背景にして、限定されざるを得なかった。1850年以前の状況を観察すると、少なくとも一時点において人口15万を越えたときみなされる都市は、大陸部ではアマラプラ (Amarapura)、アラカン (Arakan)、パガン (Pagan)、ペグー (Pegu)、アユタヤ (Ayutthia)、バンコク (Bangkok)、アンコール (Angkor) が挙げられるに過ぎず、島嶼部では皆無であった。しかも、上述の大陸部の6都市は、この期間のいづ

れにおいても人口 20 万を越えることはなかったと推定されるのである。これに対してインドではその時期までに人口 15 万を越えることのあった都市は少なくとも 24 を数え、このうち 11 の都市は人口 30 万あるいはそれ以上に達した時期があった。中国でも人口 15 万を越えたことのある都市は 19 を数え、このうち九つは 20 万あるいはそれ以上の時期があった (Chandler & Fox 1974 の数値による)。このようにみて来ると東南アジアにおける王都の小規模性が推定される。しかも上記の 6 都市のうち、19 世紀末まで都市として存続したのはバンコクのみであって、アマラプラは 1891 年に 1 万 1004 人、アラカンは 1877 年に 2068 人、ペグーは 1878 年に 4337 人、アヌタヤは 1855 年に 3 万人を数える人口を有したに過ぎず、パガンは 1300 年頃に廃墟と化し、アンコールは 1433 年に放棄された。王都は興亡の中にあって、「みやこ」の生活は人々の心にとどめられるべき性格を有していたとしても、その実在性は稀薄であったというべきかも知れない。

島嶼部において伝統的な大都市が存在しなかったことは示唆的である。ラッフルズは 1815 年の中部ジャワのススフナンの王都スラカルタの人口を 10 万 5000 人、サルタンの王都ジョクジャカルタの人口をそれよりやや少ないものと推定している [Raffles 1817: I, 63]。当時のスラカルタ領の全人口は 97 万 2727 人、ジョクジャカルタ領のそれは 68 万 5207 人 (同書 II, 290 では 66 万 372 人) と記載されているので、王国の規模とそれに見合う王都の規模を推測することができるが、これが全インドネシアにおいて、伝統的王国および王都としては最も偉大なものであったことに留意しておきたい。ジャワの世界の中心を占める存在は、物質世界ないし人口においては比較的小さいものであったと言えるのである。ギャーツによって劇場国家の範例としてとりあげられたバリ島のタバナンは、バリ島を構成する八つの小国のうち最大のものであったが、この王国の人口は、18 万人 (1820 年頃、Van den Broek の 1834 年における記述、ギャーツはこれを過大とみる) ないし、20 万人 [Moor 1837: 86] と推定されている。王宮の存在する主邑の規模が想像されよう。ギャーツはこの小単位がそれ自体の中心をもつ完結した小宇宙として存在する姿を、王宮と儀式に焦点を合わせつつユ

ニークに描写しているのである [Geertz 1980].

マレー半島やスマトラ東海岸における国家の小規模性については、アンダーソン [Anderson 1826] やニューボールド [Newbold 1839] などが当時における人口量を示しているが、例えばマレー半島では、ミナンカバウ移民の形成した極小国家群スグリ・スンビランにおける例外を除いても、海岸諸国でさえ1万ないし5万の人口を擁するに過ぎず、従ってその中心集落も余程小さかったと推定される。ミルナーはマレー半島のパハンとスマトラ東海岸のデリをとりあげて、支配者の「名声」(nama) と、それを慕う家来・同調者との関係を重視しつつスルタンへの求心性を強調しようとしているが [Milner 1982], このように個人の資質が重要となる状況はもはや都市的規模において成立するものではない。ちなみにアンダーソンによると、1823年頃のデリ王国のマレー人人口は約7000人であり、奥地の多数のバタック人がスルタンに従属しているがその数は不明という [Anderson 1826:296-297]. そしてスルタン自身はデリ川の兩岸に立地する比較的大きな散村カンボン・アレイ (Kampong Alei, または Ilir) に住んでいた。スマトラ東海岸のシルダン (Sirdang) は、ミナンカバウ系の起源をもち、シアク王国に名目的に従属する小国であったが、この場合には人口と主邑に関するより明瞭な記載があり、これからデリの状況を類推することができる。すなわち、この国のマレー人人口は約3000人、バタック人人口は約8000人と推定され、スルタン・ブサールが居住するカンボン・ブサール (Kampong Besar) は120戸ばかりからなるやや大きな村であった [Anderson 1826:301-302].

国の規模の縮小につれて、「まち」の存在の可能性が薄れて来る。クローファードは、フンボルトの主張する古代社会の都市は国家であったという見方をふまえつつ、早期の東インドの社会を論じて、村落は国家の同義語であったと述べている [Crawfurd 1820:III, 6]. スマトラ山地部における村落の独立性については、19世紀初頭から中葉にかけて多くの記述が残されているが [Marsden 1811, Zollinger 1851, Presgrave 1858 など], これらは上述のスルタン支配よりもさらに小規模な独立単位を構成するものと言えよう。

大人口単位における王都，中人口単位における王宮，小人口単位における個人的資質を有する支配者という，中心の構造にかかわる変化が認められる。単位の規模に応じて違いがあるが，いずれも求心的な構造を有している。そして，東南アジア大陸部およびジャワにおける王都の発現は，全体的な小人口構造のゆえに，その小規模性にもかかわらず，精神的な重要性が付随するかも知れない。他方，独立的とみなされる小国は完全な独立性を究極目的とする訳ではなく，上位者の名目的な権威を認めることによって，かえってその実質的な独立性と中心性を補強している側面がある [坪内 1984]。ここに精神的な求心的世界——それは決して一つの世界として構造化されることはなかったが——の構造の諸相を認めることができる。

Ⅱ むらの生成と発展

小人口状況を背景として，東南アジアにおける人々の実際の生活は，主として村落的環境において営まれていたと考えることができる。人口増殖のかなりの部分は新村形成となって現われ，人口の流れは比較的余裕のある土地の存在を前提に，たえずフロンティアへとむかっていった。伝統的な開村ないし開拓は，血縁・地縁関係あるいは主従・親分子分関係を基軸とする結合を基礎として行われた。すなわち，これらの社会関係を栄養生殖的な分裂によってそのまま移動させた形で，派生村ないし分村形成が行われたのである。派生村形成は，(1)まず最初に，ときには 100km を越える遠距離からの冒険的移住者によって最初の集落が形成され，この集落が元村などからの後続者を加えて膨張する，(2)定住が成功して人口の自然増加が著しくなると，最初の派生村から比較的近い位置に二次的派生村が形成される，という過程を経ることが多い。分離したコミュニティと親村との関係は，分離当初，とくに近接する場合には密接に保たれることもあるが，遠距離の場合には，移動伝説における精神的なつながりは保たれるものの，実際の社会関係においては次第に疎遠となり，その本末関係さえ忘れられてしまうことがある。筆者がインドネシアの南スマトラ州に

において、ムシ川の支流コムリン川に沿って集落形成史の調査を行った際にも、このような村落形成史のパターンが各所に見出されたが、コムリン川の場合は、起源地とされるバリサン山脈中のスカラブラックの人口規模がもともと小さかったこと、および移動の主流がランボン地方にむかい、コムリン川筋は傍流となったことなどのために、移動先のコミュニティ形成も小規模となり、一つの小型のモデルを提供している [坪内 1979]。ミナンカバウ系やブギス系の人々の移動は、移住地に大きな町を形成する程ではなかったが、その主邑を中心として同起源を保持する王国を建設した場合がよくみられる。

ミナンカバウ系の村落が、タラタック (taratak)、ドゥスン (dusun)、コタ (kota)、ナガリ (nagari) という完成への過程を経て形成されるということはよく知られている [Dobbin 1975, 大木 1984]。完成されたナガリは、バライ (集会所)、モスク、主要道路と枝道、闘鶏場、水浴場、広場などを備え、相当面積の水田、果樹園などを保有していなければならなかった。ナガリの完成像は都市というよりは完結した村落社会を想像させるものであることに注意したい。ミナンカバウ社会に特徴的な親族構造の構成要素としてのスク (母系氏族) を四つあるいはそれ以上含むことが要求されるという点で、ナガリはその構造のユニークさを顕示し過ぎており、また発展過程を定式化しているという点でその制度的取扱いが規範化され過ぎていているといえる。ミナンカバウ社会の外ではより非定式的な独立村形成が進行して来たことを見落してはならない。

全面的利用に先行する時代の大河流域の居住者達は、河川の自然堤防や砂州を利用して部分的な居住・耕作域を形成していた。この時期のデルタの開拓史は基本的には上述の伝統的移住のパターンに従ったものとみられる。たとえばメコン・デルタに流入した初期のベトナム人開拓者達は、自然堤防を順次居住地化していったものとみられる。デルタ開発がその特徴を呈するのは、ときには運河の開削をとまなう大量の人口移入とその増殖による低平地の全面的利用にむけてその動きがはじまってからのことである。紀元1世紀頃に交趾郡十県として、9万2440戸、74万6237人が漢書地理志に記されているベトナムのホンハデルタ (紅河デルタ) を例外とすれば、東南アジアでデルタ開拓が進行す

るのは19世紀に入ってからのものであった。1830年の下ビルマにおける水田面積は、6万6000エーカー（2万6700ha）、1930年におけるそれは991万1000エーカー（400万4000ha）と記されているから、100年間に150倍に達したことになる〔Cheng 1968:241-243〕。下ビルマの人口は1881年262万6000人、1891年330万1000人、1901年410万7000人などが記録されている〔Adas 1974:42〕。この20年間の下ビルマ人口において、デルタ地域以外で出生した者の占める割合は、1881年、1891年各12%、1901年10%であった。この割合は19世紀末には域外から大量の人口流入があったというよりは、その頃までに既にデルタ地域に居住していた人々の自然増加と域内移動で水田拡張が実現されたことを示唆している。デルタ地域への実質的な人口流入はかなり古い時期にその主要部分が完成していたと考えられる。ちなみに1852年における下ビルマ人口は100万ないし125万と推定されており（初代首席弁務官フェイアーによる推定）〔Adas 1974:21〕、この時点から1881年までに年平均2.6~3.4%の人口増加率が算出される。この増加率は当時としてはある程度の流入人口の存在を設定した方がよいだけの高さと言えるのである。

コーチシナ（メコンデルタ）の水田開発は下ビルマよりはやや遅れて進行したが、その水田面積は、1880年の時点で52万2000ha（下ビルマの40%強）、1930年において221万4000ha（下ビルマの55%強）であった〔Sansom 1970〕。開発中期にあたる1894年と1913年の間に、コーチシナの人口は、203万5300人から286万9800人へと1.41倍（年平均1.8%）増加している〔高田1984:253〕。この増加率は上述の下ビルマの1881年から1901年に至る20年間の年平均増加率2.2%を下回るものであって、この時期の開拓者人口の主要部分がメコンデルタ地域内の自然増加によって供給されたと解することも不可能ではない。1894~1913年におけるインドシナ各省の人口増加率には全般的な高率の中にかなり大きな地域の変異があり、とくにデルタ西部のフロンティア、ラクジャ、バクリュウの2省における増加が顕著である。これら2省における増加率（3.8%および4.6%）は他省からの移動を考慮せずに説明することは不可能であるが、この大部分をコーチシナ地域内からの移動と捉えることは既に述べた

数値から不可能ではない。

タイのチャオプラヤー・デルタ、マレー半島のケダー平野などについても同様の開拓過程が進行したと思われる [田辺 1973, 高谷 1982, Dobby 1951, Zaharah 1972, 口羽 1976]。いずれにしても以上の観察はデルタ開発において、大量の遠距離からの移民を必ずしも必要とはしなかったという推論へとむかっている。デルタ開発にかけられた 100 年という歳月は、人類史からみればきわめて短い。域内の人口がある程度の増加率さえ保有すれば、若干の外部移民を加えつつもこれらをもまた自己増殖の源としてとり込み、主として自己膨張によってデルタをうずめつくすことが可能であった。デルタ自体が広大であったから、新村がたえず形成され、そこには域内といってもかなりの距離を移動した人々が住みついていったに違いない。穀倉地帯として成立する地域であるから、食糧供給は十分であり、風土病や伝染病さえ顕著でなければ、人口増加は幾何級数的になり得たのである。

デルタの集落、とくにチャオプラヤー・デルタの集落は、「むら」としての組織性を欠くという点で伝統的な農村イメージから離れたものとして受取られて来た。コーネル大学のバンチャン計画はこの種の村を対象として、第二次大戦後の東南アジア農村研究の嚆矢となったものであった [Sharp *et al.* 1953]。ケダー平野の農村についても同様の地域集団としての非組織性が指摘される [口羽 1976]。デルタにおける組織性の弱い集落の出現は、集団的遠距離移民というよりは、デルタ内に形成されたある程度同質的な文化をもった住民が、一家族あるいはせいぜい数家族単位で移動していく過程の中で出現したと考えると納得しやすいかも知れない。デルタという空間の性格が非組織的な集落を生み出したとみなすのではなく、移動のパターンが非組織的な集落を形成するために一義的な役割を果たしたと考えるのが妥当であろう。次の 2 例はその傍証となるであろう。第一の例は、マレー半島東海岸クランタン川沿いに形成された天水田耕作に依存する集落である。川に面した集落の居住者やその他の土地からの開拓者達が、川から離れた土地に開田し、道路沿いに列村を形成していく過程で、集落としての組織性を欠如する連続的な家屋群が形成されたとみら

れる〔坪内 1976〕。第二は低平地における伝統的移動パターンの存在にかかわるもので、スマトラ東海岸の低湿地にブギス人達が川に直角に小水路を掘って、潮汐灌漑法を用いて開田する作業が現在も続けられているが、その初期においては明瞭な集団の移動のパターンが認められたのである〔坪内 1979〕。タイ人やマレー人における双系的な親族構造は、非組織的な集団構造との親和性を有しているようにみえる。しかし、双系的な親族構造と非組織的な集落構造とが結びつく過程は、デルタ空間を小移動が急激にうずめつくしていく場合など、特定の状況下に限定した方がよさそうである。

Ⅲ 植民都市の性格

ヨーロッパ人が東南アジアとの接触を恒常化して以来、通商基地として、あるいは後には植民地経営基地として、多くの都市が彼らによって建設されていった。植民都市として最も古い歴史を有しかつ著名であったのは、1511年にポルトガル人の手によって確保されたマラッカである。16世紀末にはスペイン人がマニラにその基地を築き、1619年にはオランダ人がジャワ島においてジャカトラを征服してバタビアを建設した。植民都市建設はその後も続き、1819年には英人ラッフルズがほとんど無人の島であったシンガポールに新都市の経営を開始し、1857年にはクラン川を遡行して来た 87 人の中国人達がゴンバック川との合流点で下船し、現在のクアラルンプールとなるべき地点で、錫採鉱をはじめようとしていた。

商業あるいは産業上の目的のために建設された都市は、形成過程の長さや役割に応じてその内的構造を異にしていた。これらの都市の人口規模は、既に述べたように、少なくとも 19 世紀後半までは、人口 15 万に達することがない小規模なものであった。民族的な関係から観察すると、これらの都市には対立する二つの様相が存在していた。第一の様相は混血人社会および混血文化の形成であり、第二の様相は民族間の分離と固有文化の保持である。前者は都市の歴史が長い場合に鮮明化し、それ自体の存在を主張するところまで到達した場合

がある。バタビアやマニラを中心とし、支配民族であったオランダ人やスペイン人との交渉の結果出現したメスティソとその文化はその典型である [Taylor 1983, etc]。マラッカにおけるポルトガル人の子孫達は、同市が1641年にオランダ人の支配下に移ったため、社会的・経済的地位の低下を経験した特異なケースとなった [Cheng 1983]。マラッカでは中国系住民の土着化も進行し、ババとよばれる土着した中国人と中国文化を生み出している [Clammer 1983, Felix 1980]。第二の様相は形成期の状況であると同時に、19世紀以降大量に流入してきた中国人やインド人を含む多様な民族の並存にともなうものであった。

1824年から1836年頃までのシンガポール人口については、かなり多くの著者がその著書やエッセイの中で、数値を示してその実態を紹介している。当時のシンガポール人口統計の分類単位となった民族カテゴリーを挙げると、ヨーロッパ人、インド系英国民、土着キリスト教徒、アルメニア人、ユダヤ人、アラブ人、マレー人、中国人、コロマンデルおよびマラバル沿岸民、ベンガルおよびその他のヒンドゥスタン住民、ジャワ人、ブギス人、バリ島人、カフィール人（バンツ系黒人）、ベルシャ人、シャム人、ポヤン人（シンガポールの隣島の住民）、コーチシナ人、ポルトガル人等である（次頁の表2参照）。構成民族の種類を異にするが、同様の多民族的状況が他のいずれの植民都市をとっても見出される。都市の内部に居住するか、周辺に居住するかについては、民族別に志向の相違があり、ここにマラッカの例を示すと次頁の表3のようになる。ここに掲げた数値は、マラッカ領に関しては1833年、同市街については1832年のものと記載されているが、事実上同年のものである。ヒンズー人、コロマンデル沿岸人、キリスト教徒、カフィール人、アラブ人、ベンガル人、ジャワ人が市街地のみに居住しているのに対して、マレー人、中国人、バタック人は市外に居住する場合がある。土着民族であるマレー人を中心に、都市とは周辺的なかわりをもちつつ生活する人々が存在することに注意しておきたい。

往時の都市における性比は注目に値するものであり、都市はその中核部を女を重要な構成要件とするメスティソ文化が支えていた場合があったとしても、その外的活動は男の世界に依存するものであった。膨張期の都市にはこの傾向

表2 シンガポール人口の民族的構成 (1826, 1836)

	1826		1836		1826—36 年平均
	人 口	性 比	人 口	性 比	増 加 率
Europeans	111	2.70	141	2.92	2.4
Native Christians	206	1.82	425	1.11	7.5
Armenians	18	2.60	34	3.25	8.5
Arabs	17		41	4.13	9.2
Natives of Colomandel & Malabar	605	17.91	2,348	22.02	14.5
Natives of Bengal and other part of Hindoostan	384	2.02	582	2.75	4.2
Siamese			3		
Bugis & Balinese	1,442	1.49	1,962	1.11	3.1
Malays	5,697	1.34	9,632	1.14	5.4
Javanese	146	3.42	903	1.80	20.0
Chinese	4,279	9.81	13,749	14.64	12.4
Others			164	1.16	
Total	12,905	2.48	29,984	3.15	8.8

資料: Crawford (1828), p. 551; Newbold (1839), I, p. 283.

表3 マラッカおよびマラッカ市街人口 (1832, 1833)

民 族 な ど	マラッカ (1833)		市 街 (1832)	
マレー人	18,296	(64.2)	3,071	(25.3)
中国人	4,764	(16.7)	3,862	(31.9)
バタック人	511	(1.8)	309	(2.5)
ヒンズー人	886	(3.1)	886	(7.3)
コロマンデル沿岸人 (Chuliahs)	1,868	(6.6)	1,868	(15.4)
シャム人	23	(0.1)	14	(0.1)
キリスト教徒	1,921	(6.8)	1,921	(15.8)
カフィール人 (黒人)	43	(0.2)	43	(0.4)
アラブ人	94	(0.3)	94	(0.8)
ベンガル人	43	(0.2)	43	(0.4)
ジャワ人	9	(—)	9	(0.1)
計	28,458	(100)	12,120	(100)

Newbold (1839): I, pp. 136-137.

がとくに著しい。1815年頃のバタビア市街およびその周辺2マイルの人口において、全人口の性比が1.20 ([Raffles 1817: II, 246] より算出) であるのに対して、8年後の1823年のシンガポールの性比は1.99であった(1947年マラヤ人口センサス Appendix C より算出)。シンガポールにおける当時の人口には43%のマレー系民族が含まれ、彼らの性比(1.06)がかなり低かったために、全人口

表4 シンガポール主要民族の性比(女=1.00)

	中 国 人	マレー人	インド人	全 人 口
1825	13.34	1.19	26.76	2.67
30	11.28	1.04	10.39	2.76
34	12.08	1.21	9.37	2.82
40	...	...	...	...
45	8.54	1.29	5.64	4.07
50	11.50	1.18	6.47	3.90
60	14.41	1.51	8.50	6.04
71	6.31	1.09	4.84	3.27
81	5.11	1.07	3.93	3.12
91	4.68	1.11	4.20	3.26
1901	3.89	1.08	4.13	2.96
11	2.85	0.98	5.05	2.52
21	2.18	1.08	5.14	2.10
31	1.68	1.04	5.48	1.75
47	1.13	1.12	3.00	1.22
70	1.02	1.03	1.52	1.05
80	1.02	1.07	1.32	1.04

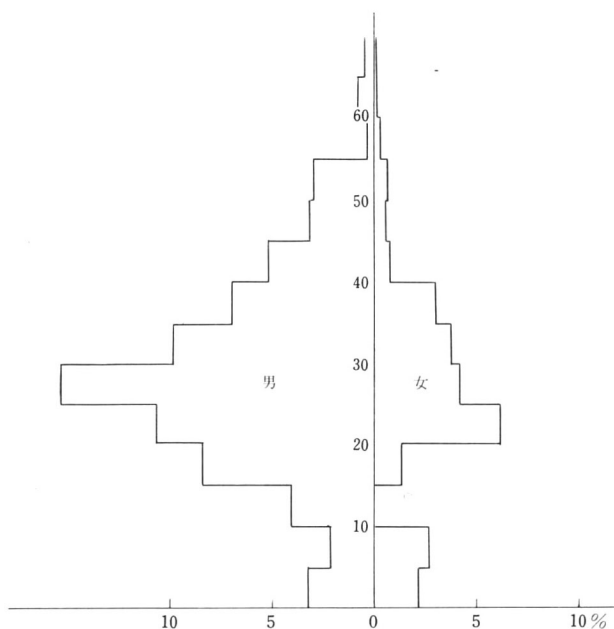


図1 19世紀中頃のシンガポール・ヨーロッパ人人口の性・年齢構造

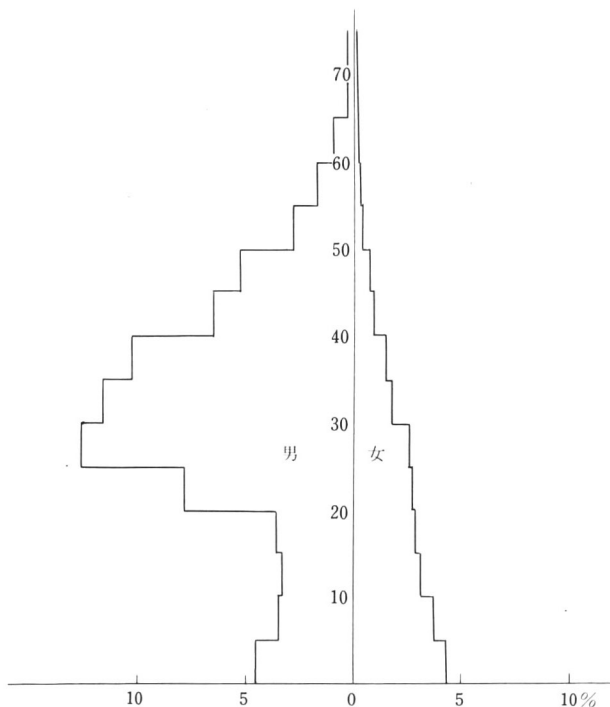


図2 シンガポール・インド人人口の性・年齢構造 (1947)

表5 シンガポールにおける出生率と死亡率 (人口1000対)

年次	(1) 出生率	(2) 死亡率	(1)-(2) 自然増加率
1881	11.4	27.2	-15.8
91	16.2	34.9	-18.7
1901	19.4	46.5	-27.1
11	21.7	51.1	-29.4
21	29.5	33.8	-4.3
31	36.4	24.2	12.2

Department of Statistics, Singapore. Report on the Census of Population 1970, Vol. 1, 1973 p. 33 による。

における性比が上述の程度におさまっていたのであるが、移民の増加とともに全人口の性比は増大し、1860年には6.04という値に達した。このときにはマレー系民族の割合は14.5%にまで低下して、中国人の割合は61.2%にまで肥大

していたのであるが、その中国人の性比は実に14.4（男子4万6795人、女子3248人）に達していたのである。この後中国人の性比は下降の一途をたどり、1931年には1.68にまで低下して来た。インド人の性比は1860年の時点では8.50であって、中国人よりも低かったが、19世紀後半に4.00を僅かに下回る状況を示したものの再び上昇に転じ、1931年には依然として5.48という高い値を示していた。1980年においてインド人性比のみが1.32という相対的に高い数値を維持しているのは、戦後まで続いた高性比の残存である（表4参照）。

シンガポールにおけるヨーロッパ人は数的にみる限り常に少数の存在であった。1871年にはその数は1946人（男1528人、女418人）となり総人口の2.6%を占めるに至るが、1850年には360人（男243人、女117人）で総人口の1%にも達しなかった。1820年代ないし30年代には、70人から150人であったことが残存するいくつかの記録から推定される。比較的早期のシンガポール居住ヨーロッパ人がどのような性・年齢構造を有していたかを、フォートカニング墓地の墓碑にぎざまれた情報〔Stallwood 1912〕を手がかりとして、若干の仮定の下に再現してみると、前掲の図1に示すようになる。再現された人口構成における性比は2.88で、1836年頃のヨーロッパ人性比2.08を上回っているが、これは人口統計には加えられなかったが同墓地に埋葬されることがあった兵士および海員の存在の影響とみられる。人口の性別構成に加えて年齢的に15～45歳の者が人口の主要部分を占めていたことが分かる。最も後の年代に至るまで性比のひずみを伝えて来たインド人について1947年センサスにおける性・年齢構造を示すと図2のようになる。女子の年齢階級別人口が自然なピラミッド状を呈しているのに対して、20～50歳男子人口が出稼ぎ人口の存在を示して異常な大きさを有していることが分かる。

シンガポールにおける出生率と死亡率の変化を1881年から1931年の間の若干の年次について示すと表5のようになる。出生率が次第に上昇していく過程は、女子の出生力自体の変化ではなく、人口統計の正確化および女子人口の割合の増加に対応するものであろう。死亡率については、とくに上述の年齢構造を考慮すると、通常ならば最も死亡しにくい年齢層から発生した死亡であるか

ら、きわめて高い水準にあるものとみななければならない。出生率と死亡率との差は自然増加率であるが、この値が閉じられた人口集団における自然増加率とは異なった意味を持つにせよ、1920年代（年次別データを調べると1922年）に至るまでマイナスの値を示していたことは重要である。極端な表現をすれば、シンガポール人口は、1920年頃までは、それ自体としては常に減少にむかう性向を有していたのであり、絶えざる人口注入によってその維持と増加を続けて来たのである。都市が墓場としての性格を有したことは、バタビア、クアラルンプール、ベンクーレンなどについても指摘されて来ており、往時のヨーロッパ都市とこの点では類似の様相があった。伝統的な農村空間に比して、人間の生活の場としては不利な状況が存在し、伝統的な生活空間であった農村から土着民が流入するには余程の決心を必要とした場であったと思われる。

中心部分において融合部分が形成されているにもかかわらず、たえざる人口流入によって異質部分が継続し、流入者の一部はたえず帰郷していくという点で一時的性が満ちあふれているというのが都市の姿であった。植民都市はその典型であるが、王都であるからといって例外を形成する訳ではなく、タイ国の首都バンコクにも同様の状況が存在していた。男の世界としての都市は居住の一時的性を基礎的な理念として構築される側面を有していたのである。

Ⅳ むらとまち——周流の構造——

現在の東南アジアにおける人間の居住空間および居住状況は、上述のむらとまちの発展の過程の延長において形成された。著しい人口増加のために過去の小人口状況はその様相をかなり失ってしまったが、人々の行動パターンの中には過去をふりかえることによって理解しやすい部分が残存している。今日の東南アジアについてまず第一に指摘されねばならないのは、やや逆説的ではあるが、農村のもつ生活圏としての意義である。開拓のための移動は丘陵地や泥炭性の低湿地など、より条件の悪い場所にむかってではあるが今なお続いている。フロンティアの減少あるいは開拓の困難さにもかかわらず村落間移動が重要な

ことは、1960年から1970年のタイ国について次のような状況として示されている。すなわち1 km²あたり人口密度25人未満(1960年)の郡全体の1960年代年平均人口増加率4.53%は、首都地域の3.45%よりも高かった。1960年代全国人口増加分の16%が都市地域で、84%が農村地域で吸収されたのである[小林1981]。東北タイにおける農村から新開拓地への移動は、「良い田を求める」(ハーナーディ)行為として慣習の中に組み入れられており、そのマイクロなレベルでの事例が、ドーンデーン村調査グループなどによって指摘されている[福井1985]。マレー半島クランタン州の天水田地域の農村ガロックでも、クランタン川上流部に新開地を求めて移動した者が1984年における筆者自身の調査の中でかなり多く数えられた。

伝統的な移動パターンにおいては、遠隔地への移住を行なった血縁的あるいは地縁的集団が新たな定住地において、時間をかけてコミュニティを熟成していく過程があった。そこには「村からの分離」と「村の形成」という一連の事象が包含されていた。デルタ開発は、小親族集団あるいは世帯を単位として、同時進行的に行われたため、コミュニティの存在を稀薄化した側面がある。現代の移動は後者に類似するところがあるが、既にある程度先住者が存在している土地で、隙間をつめるという形で家族単位の居住を行うという場合が増加している点で、フロンティアそのものというよりは準フロンティア的行動といえる側面がある。

隙間をうずめるという意味では、伝統的居住地域における集落もまたその成員の離村や死亡による隙間の発生に応じて成員の交替を行っているものであって、むらにおける成員の固定性は疑問視しなければならない。スマトラの脊梁山脈中の集落では、開村者にはじまる10世代以上にわたる系譜が伝えられていることがある。これらの系譜を有する集落は必ずしも排他的ではなく、系譜は自らのアイデンティティと親族間のつながりを確認するための用具であって、居住資格に直結するものではない。これらの集落は中核的居住者に加えて、周辺の居住者の存在を許容して来たものであって、中核の存在が失われた状態、あるいは全員が中核化した状態が、一部のデルタなどの新開地における非組織的なむ

らのイメージに重なり合うのである。

東南アジアの都市の村落に対する異質性は、量的な側面からすれば、19世紀初頭から20世紀前半までの期間に急増した中国系およびインド系移民に負うところが大きい。彼らの多くは帰国を望む出稼者であったが、状況は今世紀前半のうちに変化し、新規移入が制限される一方、都市における生活環境が改善されて、都市人口自体の自然増加が生じるようになった。土着の人口は、元来、都市の構成要素の一部であったが、移民の増大がその影を薄くしていった側面もある。クアラルンプールは1891年において人口1万9020人の小都市であって、中国人73%、マレー人、インド人各々12%などから構成されていたが、1898年にはマレー人が自らの生活様式を守ることができるよう、市の近辺にマレー人居住区 (Malay reserve) が指定された [Provencher 1971, Gullick 1983]。このような状況を背景に、都市の経済活動が土着住民を吸引する場合、彼らの都市へのかかわりは、かつての中国系・インド系の住民と同様、出稼ぎを主目的とする一時性を顕著に示した。かくして、移民における性比の均衡化にもかかわらず、国内に拠点を有する人々の場合には都市は依然として「男の世界」としての存在を継続する場合がある。この傾向は女性に対する社会・文化的取扱いに関係しているが、とくにイスラム社会において顕著にみられる。³⁾

近年のように大量の出稼ぎが発生すると、出稼ぎ者の出身地における性比が少なくとも一時的に著しく不均衡になる場合さえある。表6は南スラウェシ州において性比が低い（すなわち男子出稼ぎ者が多い）郡が増加していき、その後やや安定にむかう過程を示したものである。高い性比は都市固有というよりは、むしろ移動にともなうものであって、ミナンカバウ人を主体とする西スマトラ出身者の場合には、1971年の時点では、州外村落部居住者の性比が、州外都市部居住者の性比よりも高いことに注意しておきたい。

都市における居住が出身地別グループによって分離されていたことについては既に述べた。都市的生活の中にむらにおけると同様の人間関係が機能していることについては、東南アジアのみならず、欧米やアフリカを含んで既にかんがりの研究が行われているが、これについては以下の点に着目することが重要で

表6 性比の高さ別にみた郡の数（南スラウェシ, 1972, 1975, 1978, 1981）

性 比	1972	1975	1978	1981
1.00～	32(19.5%)	22(13.4%)	19(11.6%)	38(23.2%)
0.95～0.99	63(38.4%)	59(35.9%)	44(26.8%)	34(20.7%)
0.90～0.94	41(25.0%)	47(28.7%)	53(32.3%)	49(29.9%)
～0.89	28(17.1%)	36(22.0%)	48(29.3%)	43(26.2%)
計	164(100)	164(100)	164(100)	164(100)

Selayar 県に含まれる5郡を除く。

Kantor Sensus & Statistik, Propinsi Sulawesi Selatan, *Sulawesi Selatan Dalam Angka*, 1972, 75, 78, 81, 各年度版より算出。

あろう。第一は、都市の構成が異質的民族集団の共存に依存しているという側面、第二は都市住民と出身地とのネットワークの側面である。これらの二つの側面は関連し合っているが機能における重点の捉え方が異なっている。前者においては都市における集団的存在としての民族そのもの、およびその内部組織が重要である。後者は大量の移入民の発生を契機として近年むしろ顕在化したものであって、家族・親族・友人の個々のネットワークが根源的な重要性を有し、都市内部における同郷者の組織化はむしろその二次的な発展形態と解される面を含んでいる。

出身地との関係において都市移住者の周流性は重要な現象である〔加藤 1983, Hugo 1982, Maude 1979, etc〕。昔日の移民においては、帰郷はその最終目的に組入れられていたが、その実行は事実上困難な場合が多かった。現在の移住者においては、都市居住は明確に一時性を有する出稼ぎと、永久的な志向を有する移住とが混在している。交通手段の発達と移動者の国内限定性の強化は、都市居住者と村落居住者とのコミュニケーションを以前よりも緊密にして、都市永住者についても親族の婚礼・葬儀や、祭日における帰郷を日常化し、また通婚関係を故郷との間に設定することも容易にしている。精神世界としての都市がむらの住民に如何に無関係であろうとも、都市を生活世界としてのみ利用することが可能となっているのである。

都市が民族を融合させるるつぼであるという考え方は、民族生活をモザイクとして捉える方法と対立し、後者への注目は前者の軽視をもたらす場合があり得る。プライメート・シティ（primate city）の成立と支配を重要な様相の一つ

としながら、都市の拡大は東南アジアのいずれの国においても顕著となって来た。多くの人々が都市生活に参加することが、都市文化を生成・強化するというのは短絡的な見方であるとしても、東南アジアの都市の歴史が、独自の生活様式を育成して来た場面をも含んでいたことをも想起してみる必要がある。メスティソ的生活様式の発生にとって、通婚は一つの重要な契機を提供する。バンコクに流入した中国人が、未だに市の一部に居住地域を温存し中国的な生活様式を保持する側面を示しつつも、そのタイ社会への親和性と混住の結果、相当部分においてタイ的文化の持主へと転化している事実は重要である。移民流入がほとんど停止したシンガポールにおいて、民族間通婚がどのような形で進行するかは注目に値する。しかしながら、たとえば植民地時代における白人文化のような支配文化を有せぬ状況で、混血文化が形成可能かどうかは問題であり、異民族間通婚は周縁的存在としての地位にとどまる可能性もある。都市が知識・技術の中心となっている状況は明らかに存在するが、共通項を知識と技術およびそれらがもたらす生活水準に設定し、他を取捨選択可能なオプションとみなすことにより成立するコスモポリタンな態度がエリート層において成立し、それが文化の中心部を形成するという見通しは、現在では一つの可能性の域を出ないのである。

注

- 1) 規模においてかなり小さくなるが、高地を発祥の地とする点で、同様の状況はスマトラ南端のランボン地方にも該当する。マースデンは1811年に出版された『スマトラ史』の中で、南西部の海岸地方の住人にその起源をたずねると、彼らは、山地部の大きな湖（ラナウ湖を指す）の近くの土地から祖先がやって来たたと答えると述べている [Marsden 1811:296]。
- 2) Zelinsky [1950] は、東南アジア大陸部に着眼して、インド、中国との比較において、その人口の少なさを異常な状況 (demographic anomaly) として捉えている。
- 3) タイ国におけるバンコク居住者の出身地別性比は、北タイ出身者において低く、南タイのイスラム圏出身者において高い [坪内 1983]。またインドネシアの南スラウェシ州のトラジャ人の間でも女性の流出傾向が比較的強い [坪内 1982]。フィリピンも全地域を通じて都市における性比が低い [McGee 1967]。インドネシアの南スラウェシ州を本拠とするブギス人は、スラウェシ島外に居住する場合に顕著な高性比を示している。

引用文献

- Adas, Michael P. 1974. *The Burma Delta—Economic Development and Social Change on an Asian Rice Frontier, 1852-1941*. Madison: The University of Wisconsin Press.
- Anderson, John. 1826. *Mission to the East Coast of Sumatra in 1823*. (Reprinted in 1971

- by Oxford University Press)
- Chandler, Tertius and Gerald Fox. 1974. *3000 Years of Urban Growth*. New York: Academic Press.
- Cheng Kok Eng. 1983. The Eurasians of Melaka. In Sandhu, Kernial Singh & Paul Wheatley (eds.) *Melaka, the Transformation of a Malay Capital c. 1400-1980*. Oxford University Press.
- Cheng Siok-Hwa. 1968. *The Rice Industry of Burma, 1852-1940*. Kuala Lumpur: University of Malaya Press.
- Clammer, John. 1983. The Straits Chinese in Melaka. In Sandhu, Kernial Singh & Paul Wheatley (eds.) *Melaka, the Transformation of a Malay Capital c. 1400-1980*. Oxford University Press.
- Crawfurd, John. 1820. *History of the Indian Archipelago*. 3 Vols. (Reprinted in 1967 by Frank Cass & Co. Ltd.)
- Crawfurd, John. 1828. *Journal of an Embassy to the Court of Siam and Cochin China*. London: Henry Colburn. (Reprinted in 1967 by Kuala Lumpur: Oxford University Press)
- Dobbin, Christine. 1975. The Exercise of Authority in Minangkabau in the Late Eighteenth Century. In Reid, Anthony and Lance Castles (eds.) *Pre-colonial State System in Southeast Asia*. Monograph of the Malayan Branch of the Royal Asiatic Society, No. 6.
- Dobby, E. H. G. 1951. The North Kedah Plain, A Study in the Environment of Pioneering for Rice Cultivation. *Economic Geography*, 27-4.
- Felix, Chia. 1980. *The Babas*. Singapore: Times Books International.
- 福井捷朗. 1985. 「東北タイ・ドンデーン村：人口動態（第一報）」『東南アジア研究』23—3.
- Geertz, Clifford. 1980. *Negara, the Theatre State in Nineteenth-Century Bali*. Princeton University Press.
- Gullick, J. M. 1983. *The History of Kuala Lumpur (1857—1937)*. Singapore: Eastern Universities Press.
- Hugo, Greme. 1982. Circular Migration in Indonesia. *Population and Development Review*, 8—1.
- 加藤 剛. 1983. 「都市と移住民：ジャカルタ在住ミナンカバウの事例」『東南アジア研究』21—1.
- 小林和正. 1981. 「タイ国人口増加の地域構造：1960～1970年」『東南アジア研究』19—1.
- 口羽益生. 1976. 「ケダーの稲作農村パダランラン」口羽・坪内・前田編著『マレー農村の研究』創文社.
- Logan, J. R. 1849. A General Sketch of Sumatra. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, 3.
- Marsden, William. 1811. *The History of Sumatra*. (Reprinted in 1966 by Oxford University Press)
- Maude, A. M. 1979. How Circular is Minangkabau Migration? *Indonesian Journal of Geography*, 9—37.
- McEvedy, Colin & Richard Jones. 1979. *Atlas of World Population History*. Penguin books.
- McGee, T. G. 1967. *The Southeast Asian City, a Social Geography of the Primate Cities of Southeast Asia*. London: G. Bell & Sons.
- Milner, A. C. 1982. *Kerajaan: Malay Political Culture on the Eve of Colonial Rule*. The University of Arizona Press.
- Moor, J. H. 1837. *Notices of the Indian Archipelago, and Adjacent Countries, Being a Collection of Papers Relating to Borneo, Celebes, Bali, Java, Sumatra, Nias, the Philippine Islands, Sulus, Siam, Cochin China, Malayan Peninsula, etc.* (Reprinted in 1968 by Frank Cass & Co. Ltd.)

- Newbold, T. J. 1839. *Political and Statistical Account of the British Settlements in the Straits of Malacca*. 2 vols. London: John Murray. (Reprinted in 1971 by Oxford University Press)
- 大木 昌. 1984. 『インドネシア社会経済史研究』 勁草書房.
- Presgrave, E. 1858. Journey to Pasummah Lebar and Gunung Dempo, in the Interior of Sumatra. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, Series II, 2.
- Provencher, Ronald. 1971. *Two Malay Worlds: Interaction in Urban and Rural Settings*. Berkeley: Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.
- Raffles, Thomas Stamford. 1817. *The History of Java*. 2 vols (Reprinted in 1965 by London: Oxford University Press)
- Sansom, Robert L. 1970. *The Economics of Insurgency in the Mekong Delta of Vietnam*. Cambridge: The M. I. T. Press.
- Sharp, Lauriston et al. 1953. *Siamese Rice Village: A Preliminary Study of Ban Chan, 1948—1949*. Cornell Research Center, Bangkok.
- Stallwood, H. A. 1921. The Old Cemetery on Fort Canning, Singapore. *Journal of the Straits Branch of the Royal Asiatic Society*, 61.
- 高田洋子. 1984. 「20世紀初頭のメコン・デルタにおける国有地払下げと水田開発」『東南アジア研究』22—3.
- 高谷好一. 1982. 『熱帯デルタの農業発展——メナム・デルタの研究』 創文社.
- 田辺繁治. 1973. 「Cho Phraya デルタの運河開発に関する一考察 (I), (II)」『東南アジア研究』11—1 および 11—2.
- Taylor, Jean Gelman. 1983. *The Social World of Batavia, European and Eurasian in Dutch Asia*. Madison: Wisconsin University Press.
- 坪内良博. 1976. 「クランタンの零細農村ガロック」 口羽・坪内・前田編著『マレー農村の研究』 創文社.
- 坪内良博. 1979. 「南スマトラ, コムリン川流域およびムシ川下流部における集落形成史」『東南アジア研究』17—3.
- 坪内良博. 1982. 「南スラウェシの人口移動と性比の変動に関するノート」『東南アジア研究』20—1.
- Tsubouchi, Yoshihiro. 1983. Traditional Migration Patterns in Southeast Asia and Their Survival. 『人口学研究』6.
- 坪内良博. 1984. 「東南アジア島嶼部における『小国』の存在形態に関するノート」『東南アジア研究』22—1.
- Zaharah binti Haji Mahmud. 1972. The population of Kedah in the Nineteenth Century. *Journal of South East Asian Studies*, 3.
- Zelinsky, Wilbur. 1950. The Indochinese Peninsula : A Demographic Anomaly. *The Far Eastern Quarterly*, 9—2.
- Zollinger, H. The Lampong District and Their Present Condition. *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*, 5.

(坪内 良博)